

JSQCニュース NO.194

1997年2月

発行 社団法人 日本品質管理学会 東京都杉並区高円寺南1-2-1 (財)日本科学技術連盟東高円寺ビル内 電話 03(5378)1506

APQOとウォルターL.ハード基金

APQOとは

APQO (The Asian Pacific Quality Organization) は、アジア、太平洋地域の各国を代表する品質関係の協会、学会をその傘下とする包括的団体です。地球の人口の2/3を占め、USA、日本という経済大国も擁するアジア太平洋地域において、ASQC、EOQそしてわが国のJUSEに模して、品質に関する役割を担うことを目的とした機構です。

1981年マニラでの15ヶ国の参加による第1回アジア太平洋地域品質国際会議、88年のメキシコシティでの第2回国議の開催等の基準期間を経て、85年の北京で開催された第3回国議で、正式に設立されています。その活動の柱であるアジア太平洋地域品質国際会議の開催は、2年おきを原則として、88年にはソウル、91年にはオーランド、94年にクアラルンプールで開催されています。現在の正式の加盟国は、オーストラリア、中国、台湾、香港、韓国、マレーシア、メキシコ、ニュージーランド、フィリピン、シンガポール、スリランカの11ヶ国であり、各国を代表する品質関連の協会・学会が登録されています。加えて、ASQCは設立の過程や資金の提供等、APQOに大きな支援的な役割を果たしているようです。

ウォルターL.ハード基金

APQOの新しい活動として、元ASQC会長の名前を冠したオオルターL.ハード

基金の運用があります。この基金は、アジア太平洋地域の品質プログラムの普及や研究者の交流を目的として、94年に設立されています。

その中の重要な柱として2種類のメダル（賞）の授与があります。ひとつは、ウォルターL.ハード・エグゼクティブ賞です。こちらはアジア太平洋地域において品質管理活動に特に貢献した企業のトップに贈られるものです。今ひとつは、ハーリントン／石川・品質賞（HI品質賞）と呼ばれるものです。故石川馨先生の名前と、現在コンサルタント会社であるアーンスト・ヤングのプリンシパルを務めるジェームズH.ハーリントン氏の名前を冠したものです。これは85年のアジア太平洋地域品質国際会議から、両氏が特にパーマネント議長として指名されたことの功績によるものと思われます。こちらの方は、品質の方法論の発展に著しい寄与をした専門家、研究者に与えられるものです。

米山前会長が受賞される

96年10月のフィリピンのマニラで開催されたAPQOの会議で、コニカ㈱会長で当学会前会長の米山高範氏が、ウォルターL.ハード・エグゼクティブ賞に決定し受賞されました。受賞理由は、直訳すると、「米山氏は、アメリカ、アジアの経営者がかつて到達したことがないクリティ・スタンダードを示した」というも

のです。学会としては心よりお祝い申し上げます



ちなみにHI品質賞は、米国ジェネラル・システム社会長のアーマンドV.ファイゲンバーム氏が選ばれ、石川夫人より賞が授与されたそうです。

現在、97年の候補者のノミネートを受け付け中とのことです。ノミネート候補の応募様式は、学会事務局に問い合わせていただければお知らせいたします。

以上、APQOおよび新設された2つの賞についてお知らせいたしましたが、APQO自体は加盟国を次の10年で2倍に増やしたいとの意向があるようです。アジア太平洋地域にあるわが国とのメンバーシップ等の関係については、当学会ではまだ議論されていません。韓国、台湾と当学会とで毎年開催しているAQS（アジア品質シンポジウム）との関連も含めて、いずれ関係が深まることが期待されます。

なお、本稿は国際委員会からの依頼で、文献およびレター等を参照しながら編集したものです。編集委員会 圓川隆夫

私の提言

世界に発信できる
新手法の確立をめざして

松下電工株式会社 専務取締役 山中喜代治

久しぶりに米国に出張し、昨日帰国しました。出張先は昨年のオリンピック開催地のアトランタで、滞在日数

3日間というあわただしい日程ではありましたが、今なおダイナミックに発展する米国の活力を充分に感じ取ることできました。

「風と共に去りぬ」の古き良き時代の面影は、今では微塵も感じることはできませんが、世界第2の国際空港、そこから伸びる片側6車線のハイウェー、整然と立ち並ぶ高層ビル、林の中の広大な敷地の高級住宅、大規模なショッピングセンターなど米国の底力は衰えるどころか、益々充実拡大しているように思われました。

翻って我が国の現状は、かつてのジャパンアズNo.1と賞された1985年頃の光を失い、日本脅威論も影をひそめジャパンバッシングと言われる始末であります。わずか10年あまりの間になぜ、これほどまでに米国が自信を回復し、日本が衰えてしまったのか、大いに反省しなければなりません。

アメリカでは、最も元気をなくしていた1985年頃から米国国防省がスポンサーになり、日本企業の強さの秘密を解明し、学ぶべきところは何かという研究がなされました。その結果が今ではTQMといわれる日本のTQCであり、職能横断的小チームの活用など日本独特のビジネスプロセスや、製品開発システムに注目した研究の結果生み出された「リエンジニアリング革命」がありました。米国が日本から謙虚に学ぶべき所を学びとっている間に、我が国では逆におごりが出たということであり、この点は大いに反省しなければなりません。

米国で普遍化されたTQMやリエンジニアリングを日本が再度学ぶということも必要なことではありますが、これはもともと日本の強みであって、当面最大の課題解決にはなりません。日本の課題は、我々独自の発想で開発した全く新しい商品を世に送り出して世界に貢献することであり、またこうした独創的な新商品をスピーディに開発し、品質トラブルの未然防止をどう進めていくか、ということです。米国に学ぶべきところは、大学で研究された新しい技術をもとにし、次々と新事業が生まれている産学共同についてであると思います。

日本品質管理学会では、産業協調の場として最も推進しやすい環境にあると思います。これまでの指導する側と指導を受ける側といった関係ではなく、企業活動の場で起こっている問題点にテーマを求めて、大学と企業の研究者が共に協力し合って真に日本発と言える新しい手法を取り組むべき時であると思います。

行事案内

●第224回事業所見学会（関西支部）

見学先：ダイハツ工業㈱本社（池田）工場
池田市ダイハツ町1-1
日 時：4月15日(火)13時30分～16時30分
テマ：「ミゼット工房における手作りの品質保証」
定 員：40名 申込締切 3月31日(月)
参加費：会員2,000円、非会員3,000円
申込方法：同封の参加申込書で関西支部宛に申込みください。

●第226回事業所見学会（関西支部）

見学先：造幣局 大阪市北区天満1-1
日 時：4月22日(火)13時30分～16時30分
テマ：「小集団活動による貨幣の品質作り込み」（仮題）
定 員：50名 申込締切 4月7日(月)
参加費：会員2,000円、非会員3,000円
申込方法：同封の参加申込書で関西支部宛に申込みください。

●第225回事業所見学会（中部支部）

見学先：ヤマハ㈱本社工場
静岡県浜松市中沢町10-1
事業概要：ピアノ等楽器の製造・販売

日 時：4月17日 (木)14時～16時

テマ：「魅力ある商品開発 (Part II)
サイレント楽器に見る新たな需要の創造と提案」

定 員：50名（同業他社お断り）

参加費：会員2,000円、非会員3,000円

参加締切：4月11日(金)定員になり次第締切

申込方法：会員No.氏名、勤務先、住所、所属、電話番号を明記してFAXで中部支部宛申込みください。

●第55回研究発表会・本部（発表募集）

開催日時：1997年5月31日(土)10時30～17時
会 場：日本科学技術連盟 本部

(1)申込期限

発表申込みおよび 発表要旨締切 3月28日(金)	200字詰原稿用紙1枚以内または ワープロで200字以内 発表申込書が書き次第要旨「原稿の書き方」等を送付します。
予稿原稿締切 5月8日(火)	(22字×40行×2段)×4枚以内
参加申込締切 5月23日(金)	会員には4月下旬に研究発表会 ご案内(付)参加申込書を送付します。(注)

(注)非会員の方は、FAX等で本部事務局

まで参加申込書をご請求下さい。

(2)研究発表・事例発表の申込方法

会員No.氏名（発表者には○印を記入）、勤務先、電話番号、連絡先を明記のうえ、発表要旨を添えて上記期日までに事務局宛送付してください。

(3)参加申込方法

参加申込書に所定の事項をご記入のうえ、本部事務局まで申込みください。

各種行事の申込先

○本 部：〒166 東京都杉並区高円寺南1-2-1、(財)日本科学技術連盟内、(社)日本品質管理学会事務局、電話03(5378)1506 FAX03(5378)1507

○中部支部：〒460 名古屋市中区栄2-6-12、白川ビル、(財)日本規格協会名古屋支部内、(社)日本品質管理学会中部支部、電話052(221)8318、FAX052(203)4806

○関西支部：〒530 大阪市北区堂島浜2-1-25、中央電気俱楽部、(財)日本科学技術連盟内、(社)日本品質管理学会関西支部、電話06(341)4627、FAX06(341)4615

わが社の最新技術

SRSサイドエアバッグシステム開発

日産自動車(株) ボディ開発総括部 安全装置開発課 木村 正人 倉田 秀則

日本の交通事故の実態は1988年以降1年間の死者が毎年1万人を超えており、事故対策の強化が車両、道路環境、その他の多方面にわたって進められている。

わが社では車両側での対策として視界確保(インフォメーションセーフティ)、危険回避(コントロールセーフティ)、衝突安全(インパクトセーフティ)の3つの技術を向上させることで多くの交通事故被害者の低減活動を進めてきている。例えば、インパクトセーフティにおいてはゾーンボディコンセプトに基づく衝撃吸収ボディ及び高強度キャビンの実現、シートベルトの着用促進に加え、業界に先駆けての運転席・助手席SRSエアバッグシステムの標準装備化を推進してきた、さらに日本自動車メーカーとして初めて運転席・助手席SRSサイドエアバッグシステムを実用化し96年春発売のシーマより採用を開始している。

このサイドエアバッグシステムとは、万一、車両が側面から大きな衝撃を受けた時、衝撃を受けた側のサイドエアバッグ(運転席または助手席)が瞬時に作動し、高強度車体、エネルギー吸収ドアとともにシートベルトを着用した乗員の主に胸部にかかる衝撃を分散、緩和するものである。

このシステムは、車両が受けた衝撃を感じ、システム作動の要否及び作動タイミングを判断する側面衝突専用センサー、及び車室内に配置したセンサー・コントローラユニットと、そのユニットからの信号で作動するサイドエアバッグモジュール(運転席・助手席シートバックに組み込み)、電気系統の故障時に警告する警告灯から構成されている。

側面衝突の場合、衝突部位と乗員との距離が前面衝突に比べて短く、前面衝突に対してより速い衝突感知とバッグ展開が要求される。この為、専用電子センサーを左右センターピラーに各々配置し極めて短時間の衝突感知を実現している。

第59回講演会(本部)ルポ

平成8年10月21日(月)、日本科学技術連盟東高円寺ビルにおいて、『市場機会に迅速に対応する経営(アジルカンパニー)』、と題し一橋大学野中郁次郎教授よりアシリティー(俊敏性)さらには知識創造の必要性とこの高め方に関する講演を載いた。要旨は以下の通りである。

〈現在の経営学における課題〉

経営の指針となる新しいパラダイムを模索している。すなわち従来の縦型経営は階層・分業・専門化のゆき過ぎからタコ壺化や中間管理職の増大といった問題を抱えている(特にアメリカで)。この対応として従来無かったマーケットを指向して横串すなわちプロセスでマネージする考え方を提唱された(リエンジニアリング)。

一方、新たに圧縮ガス式のハイブリッドタイプガス発生器(高圧のアルゴンガスを封入し、燃料の燃焼熱でガスを膨張させてバッグ内に送り込むもので、廃棄時の環境も考慮したタイプ)を採用、又、バッグをシートバッグに搭載し乗員の胸部を保護する必要十分なサイズのバッグを採用したことにより短時間のバッグ展開を実現している。これらにより、50km/hで真横から側面衝突された場合、衝突の瞬間から2/100秒程度でバッグが展開終了する。



SRSサイドエアバッグ展開イメージ図

さらにこのシステムは、万が一の不動作・誤作動があってはならないことが要求される。即ち、通常の走行状態や車の使用時の入力(縁石乗り上げ、ドア急閉等)、軽微な衝突等では作動させない必要があり、逆に、シートベルトを着用していても大きな傷害が発生するような側面衝突事故において確実に作動させなければならぬことが要求される。この為センサーは常時衝撃力をモニターし、衝撃加速度の変化をアルゴリズム(複数の演算式の組み合わせ)に基づいて演算し必要な時のみ点火信号を出すようになっている。又、センサーの電気的な单一故障により即誤作動に至らないためのセーフィングセンサー、伝記系統の故障を常時診断し、故障時にはユーザに警告灯で知らせる故障診断機能、衝突による万一の電源故障に対する補助電源等を設け、高い信頼性を確保している。

このサイドエアバッグシステムは万一の安全の為に開発したが、開発した者としてはこれが使われない事を願っている。

この中ではITの活用や企業の境界を越えたバーチャル(仮想)企業の活用といった新たな概念が含まれているが、リエンジニアリングは成功したかというと、ロジックではうまくいくが情報技術で人間を代替するには無理との結論が一般的である。

〈では何を求めたらよいのか?〉

新しいコンセプトとして知識社会特にホワイトカラーの『知の生産』を問題視している。また「知的資本」というコンセプトが提唱され、この中では知識をいかに測定しマネージするかがキーとなつておる、人の「知」を大切にする方向に向かいつつある。

さらにはこれを出来るだけ早くやる必要があり、これがアジル・カンパニーの考え方である。効率と創造性の両者を追求する従来あまり経験をしていないマネ

ジメントを進める必要がある。

〈重要なのは『知』の創造〉

『知』には「形式知(言語、ドキュメント可能な知)」と「暗黙知(語れる以上に知っている)」の2つのタイプがある。目に見える形式知は氷山の一角でありこの背後にある暗黙知は未開拓である。特に『心眼』と言われる認識のスキル(モノを見た時にその本質を直感的に把握するスキル)にメスを入れ、両者の共同化・表出化・連結化・内面化といった知識を増幅するスパイラル運動を組織的に起こし、加速するマネジメント、リーダーシップが重要となる。最後に、「TQMも暗黙知まで踏み込まないと本質的な知のマネジメントは出来ないのではないか」との問題提起もあり有益なる講演であった。

武川和洋(日産自動車)

ホームページ開設のお知らせ

この度、(社)日本品質管理学会のホームページを開設することになりました。URLは次のとおりです。ただし、これは暫定的なものとなります。

<http://www.stat.ie.musashi-tech.ac.jp/jsqc/>

これから会員各位のご意見をもとに、より良いものとしていきたいと思います。よろしくご協力の程お願いいたします。

CALL FOR PAPERS
QUALITY MANAGEMENT AND ECONOMIC DEVELOPMENT
ZHENGZHOU, P.R. China
8-10 th September, 1997
日本の窓口近藤良夫氏(IAQ chairman)
詳細は、本部事務局(03-5378-1506)

第36回公開大学講座ルポ 慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパス

さる9月6(金)、第36回公開大学講座が、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスにて34名が参加して行われた。ここは全国でも希にみる情報化が進んだ新しい概念の教育施設として脚光をあびており、大学関係者、企業から注目されているところであります。このキャンパスは1990年に開校し、総合政策学部と環境情報学部の2学部があり、学部、大学院で約4400名の学生が在学し、175名の教職員により運営されている。

参加者はまず4班に分かれ、まだ夏期休講中にも拘わらず登校してもらった学生の皆さんのが案内でキャンパス内の見学を行った。ギリシャ文字がつけられた近代的な学舎が広いキャンパスの中に散在し、教育環境として、大変うらやましいたたずまいである。それぞれの学舎にはマルチメディア関係の機材が充実していることもあり、学生一人一人のIDカードで教室の出入りが管理されている。

600名を収容し、日本に2台しかないという大スクリーンを装備した大教室、パソコンがズラッと並んだ研修室、ビデオ編集も自在の設備、600台のワークステーション等ハード面も大変充実しているが、キャンパス内をつなぐコンピュータネット

ワーク(SC-CNS)等のソフトのインフラも十分であり、それも24時間学生にはオープンとのこと。



70%はパソコンの素人という新入生がすぐにブラインドタッチができるようになり、レポートはパソコンやビデオで提出し、コミュニケーションは電子メールで行い、全員がホームページを持つようになるとのこと。案内してもらった学生さんにも、自分のホームページを出してデモンストレーションをしてもらった。

見学の後、会議室で環境情報学部齊藤信男部学長より「マルチメディアと大学教育」と題して講演を頂いた。このキャンパスが出来るいきさつ、マルチメディア環境、研究活動、教育への活用等について大変興味のあるお話をあった。その後、情報化時代の人材育成、学内のコミュニケーション等について活発な意見交換があり有意義な公開大学を終了した。

長谷川直哉(日産自動車)

「品質」誌、投稿論文の募集!

会員の方々からの積極的な投稿をお勧めします。投稿区分は、報文、技術ノート、調査研究論文、応用研究論文、投稿論説、クオリティーレポート、レター、QCサロンです。

「品質」誌編集委員会

1996年12月の入会者紹介

1996年12月13日の理事会において、下記のとおり、正会員14名、賛助会員1社1口の入会が承認された。

(正会員) 14名 (敬称略)

○飯久保 衛(日東工業)、○浜口友一(NTTデータ通信)、○山本 茂(竹中工務店)、○船引隆弘(日立製作所)、○大林譲治・崎岡雅行・島村 敏(豊田自動織機製作所)、○下園昌輝(静岡日本電気)、○須山榮蔵(カルソニック)、○岸田哲二・堀田善次(関西電力)、○樋口浩一(ミノルタ)、○横瀬勝規(日本電信電話)、○楳野輝夫(マツダ)

(賛助会員) 1社 1口

○コマツ・キャリア・クリエイト(代表取締役社長嶋田英輔)

12月13日現在の会員数

正会員: 2954名

準会員: 36名

賛助会員: 231社、256口

ニュース・参加のおすすめのミスプリ訂正

第61回講演会(関西支部)の講演2のテーマおよび講演者名を次のとおり訂正し、お詫びいたします。

テーマ: 残光・3波長形蛍光ランプ「ホタルック」の開発

講演者: 西影陽介氏(日本電気ホームエレクトロニクス㈱)